書評　『覚醒のネットワーク』

上田紀行著　カタツムリ社　定価1200円　176頁

須田　桂吾（日本労協連センター事業団）

この本が書かれたのは、1986年9月、著者がスリランカに地元のＮＧＯであるサルボダヤ運動のフィールドワークを展開していた、ちょうど10年前のことである。

あのころというのは、私自身の記憶と照らし合わせてみても、フロンガスによるオゾンホール、熱帯雨林の砂漠化、酸性雨といった環境問題があらためてマスコミを賑わし、一般大衆の意識に大きな影響を与えはじめたころ。また、Ｊ．リップナック、Ｊ．スタンプスの手による『ネットワーキングーヨコ型情報社会の潮流』が日本で翻訳され、金子郁容『ネットワーキングへの招待』が出版されたころとも重なるなど、地球大の諸問題に対して市民がこれまでとは違った「もうひとつの」つながりを形成しはじめていたころと言うことができるだろう。その数年後には周知のとおり、ベルリンの壁の崩壊に象徴されるように戦後長らく続いた東西冷戦が終結し、日本でも、バブルが弾け、55年体制が綻びを見せはじめるなど、世界的な規模で、これまでのシステムが崩れ、新しいシステムへと移行する時代を迎えるに至った。

というわけで、そうした時代的変化を感じとっていた著者からのメッセージは、勢い、地球大の諸問題、それらを解決しようとする社会運動、そして、それら外的な様相を言わばもう一方から規定している、現代のひとりひとりの「私」のあり方など、大きく全体を包含するものである。そうした大きなテーマを、実際そうした地球大の諸問題に影響力を持っているだろう、ひとりひとりの私たちに対しても十分届くような優しい言葉で、200ページにもみたないこの小さな本のなかで語りかけているのである。

それは、私たちの身近な疑問から始まっている。豊か豊かと言われる先進国日本に住んでいるにもかかわらず、仕事が忙しくて過労死するひとがいてみたり、学校ではいじめで自殺する子がいる。また、我が身に目を転じてみても、マスコミの情報に振りまわされてみたり、どこか毎日顔色が冴えなかったりする。先進国では捨てるほど食べ物が有り余っている一方で、途上国では、今でも、貧困によって死ぬひとは戦争で死ぬ人の何十倍にものぼる。著者の主張は、こうしたことは、すべて大きなところでつながり合っていて、わたしたちの自我のあり方、ライフスタイル、社会システムのあり方などが構造的につくりだしている問題群である。まずは、そうしたことに「気づくこと」が出発点となる。

この本は、現代に生きる私たちが多かれ少なかれ問題と感じていることがらを、クリアーにその構造を浮かび上がらせて示してくれている点でも万人に送られるべき内容となっている。しかしながら、やはり疑問として残るのは、果してすべての人々がここで言う「覚者」となりうるだろうか、ということである。もしそうならなかった場合、構造的な暴力は、地球を、そしてすべての「いのち」を痛めつけつづけるのであろうか……。

この本を出版した「カタツムリ社」の加藤哲夫さんは、仙台を中心に、市民のエコロジー運動、最近ではＨＩＶ訴訟の問題にかかわって積極的にネットワーキングしている人である。11月に仙台で行なわれる協同集会にも参加する予定である。

本書は、私にとっては、久しぶりに深いところで心を揺り動かされるような感動を与えてくれた本といえる。10年ほど前の時代の雰囲気を思い出させてくれて懐かった。あの頃心に銘記した原点が蘇ってきたような、そんな気がしたものである。